

## 明治・大正の文学者たち

関西学院大学図書館では、図書館所蔵の貴重図書など普段目にする機会の少ない図書資料を紹介する機会として、特別展示を年1回企画している。第8回特別展示（1999年11月開催）は「明治・大正の文学者たち」と題して、貴重図書「八重津家旧蔵書簡・手稿」（八重津家旧蔵資料）と特別文庫「丹羽記念文庫」を中心に、近代文学者の書簡や原稿などを紹介した。

展示資料は第1部「近代文学者の書簡」として、芥川龍之介、巖谷小波、真山青果らの書簡など10点、第2部では「近代文学者の草稿・原稿」として、高村光太郎草稿、与謝野晶子資料、三木露風歌稿など18点である。

展示解説は清水康次 光華女子大学日本文学科教授にお願ひし、「丹羽記念文庫について」の解説文は第4回特別展示解説（中島洋一本学名誉教授）から引用した。なお、八重津家旧蔵資料については、細川正義 本学文学部教授と日本文学研究科大学院ゼミ学生に資料の判読と印刷物の確認作業で協力をいただいた。

また、この特別展示に関連して学術資料講演会も同時に開催し、光華女子大学の清水康次教授に「書簡資料に見える文学者たち」と題して、主に明治・大正期の作家と編集者との繋がりについて講演していただいた。



江見水蔭書簡

### 八重津家旧蔵資料について

光華女子大学日本文学科教授  
清水 康次

八重津家旧蔵資料は、八重津輝勝（やえづてるかつ、九州医学専門学校（現・久留米大学）教授（解剖学）1886（明治19）年～1934（昭和9）年）の蒐集によるものであり、御子息である八重津洋平関西学院大学名誉教授・元図書館長（1996（平成8）年3月退職）によって、1997（平成9）年10月、関西学院大学図書館に寄贈された。近代の文学者・著名人の書簡17点と、近代の文学者の草稿及び原稿14点からなり、すべてが自筆の資料である。今回は、その中から書簡4点、草稿・原稿4点を選び、貴重書の草稿1点を加えて、9点を紹介し、あわせて参考資料約20点を展示した。

資料については、今回は便宜上、形態によって書簡類と草稿・原稿類とに分けて配列したが、文学史的には、二つのグループとそれ以外のものとの三分類することができる。

第一のグループとまとめられるものは、巖谷小波の角田浩々歌客宛の書簡（展示 2）、江見

水蔭の八重津輝勝宛の書簡（展示 4）と葉書5点・封筒1点、上司小剣の黒田湖山宛書簡、泉斜汀の黒田湖山宛書簡、山岸荷葉の原稿「節分の夜」、前田曙山の草稿「春の七草」で、硯友社（けんゆうしゃ）系の作家にかかわる資料という共通性がある。

硯友社とは、1885（明治18）年2月に尾崎紅葉・山田美妙らが始めた文学者の集まりであったが、機関誌『我楽多文庫』などを通じて大きく発展し、1888（明治21）年・1889（明治22）年の美妙・紅葉の文壇進出を初めとして、川上眉山・巖谷小波・江見水蔭・広津柳浪・泉鏡花・小栗風葉ら、多くの作家を輩出していく。硯友社系の作家たちは、明治20年代から30年代にかけて文壇の主流となり、紅葉・小波・水蔭らは、それぞれに多くの門弟すなわち新進作家たちを抱えることになる。黒田湖山・泉斜汀・山岸荷葉・前田曙山らは、このような硯友社の二代目の作家たちである。しかし、彼らの隆盛の期間は長くはなく、次には自然主義の文学が台頭してくることになり、これらの作家の多くが進路を変え、また筆を折っていく。水蔭は、創作の重心を探検小説などに移し、晩年は揮毫と講演によって全国を行脚し、その途上、九州

で八重津輝勝と親交を結んだ。小波も、口演旅行で各地を巡遊しつつ、一方で、編集や出版の仕事も多く手がけていく。黒田湖山は新聞社に入社して、また、山岸荷葉は演劇界に移って、いずれも創作からは遠ざかっていく。

ところで、明治・大正期には、作家と編集者を兼ねる者が多く、作家が一時期新聞や雑誌の編集を行った例は枚挙にいとまがない。夏目漱石でさえ、『東京朝日新聞』の連載小説や文芸欄の執筆者選別に苦慮し、各作家とのスケジュールの打ち合わせに煩わされた時期があったように、作家と編集者は十分に分業されていなかったといえる。従って、作家が編集者に宛てた手紙は、同業者への説明であり、言い訳であり、アピールであるという色彩を持つことが多い。硯友社系の資料以外にも、八重津家旧蔵資料の中には、このようなあり方をうかがわせる資料が多く、芥川龍之介の小島政二郎宛書簡（展示 1）や真山青果の角田浩々歌客宛書簡（展示 2）も含めて、作家と編集者とのかかわりの問題を、今回の展示資料からうかがわれる一つのテーマと見ることができる。

八重津家旧蔵資料の第二のグループは、近代の詩歌にかかわる資料である。

高村光太郎「小娘」（展示 5）は、時期的には『道程』以後にあたる1917（大正6）年制作の詩の草稿である。「家」（展示 5）はやや後の時期に書かれた文章であるが、文中に、1916（大正5）年発表の詩「わが家」が引かれている。特別展示では、1910（明治43）年4月号の『スバル』に掲載された「緑色の太陽」を参考資料として置き、光太郎の変化を示した。光太郎は、この後、さらに変化の激しい長い道のりを歩くことになる。与謝野晶子の資料「婦人と短歌」（展示 6）は、従来から本図書館に所蔵していた資料である。光太郎の草稿・著書・雑誌と対照させて、晶子の資料・著書・雑誌を並べることで、『明星』『スバル』から始まる詩歌の流れが視野に入るようにした。晶子もまた、『明星』や第一歌集『みだれ髪』での浪漫主義から、長い着実な道のりを歩くことになる。

三木露風の歌稿「彩雲」（展示 7）、前田夕暮の歌稿「潮鳴」（展示 8）、尾山篤二郎の歌稿「家の歌」、正富汪洋の詩稿「山椒にまつはる愛着」は、車前草社（しゃぜんそうしゃ）や雑誌『詩歌』を通じてつながりのある歌人・詩人の歌稿・詩稿であり、関連の深いものと考えられる。車前草社とは、尾上柴舟を中心とする、正富汪洋・前田夕暮・若山牧水・三木露風ら歌人の集まりであり、1905（明治38）年に始まり、



高村光太郎草稿  
「小娘」

1907（明治40）年頃まで続いた。『明星』の浪漫主義に対抗する勢力であり、自然主義歌人と呼ばれる夕暮・牧水を世に送り出していく。一方、露風は、1909（明治42）年、詩集『廃園』を刊行し、短歌から詩へと活動の中心を移していく。

これら二つのグループ以外のものとして、芥川龍之介の小島政二郎宛書簡（展示 1）、遅塚麗水の角田浩々歌客宛書簡、三宅花園の原稿「花の趣味」（展示 9）、笹川臨風の前稿「今と昔」、佐々醒雪の前稿「常陸の海」などがある。芥川龍之介の書簡は、後輩の作家であり、当時雑誌『赤い鳥』の編集にかかわっていた小島政二郎に宛てた書簡であり、「蜘蛛の糸」「地獄変」についての言及があり、資料的な価値も高い。三宅花園は、樋口一葉とも親しかった、一葉に先立つ女性作家、すなわち近代の初頭に立つ女性作家である。小説の執筆期間は短く、展示した資料は、やや後の時期の随筆であるが、花園は、今後より多くの注目を必要とする作家であるといえる。

これらの資料は、それぞれの方向から近代の文学者に光をあてる資料である。そこに浮かび上がる作家の横顔や時代の影、また文学の香気を感じとっていただければ幸いである。以下の「丹羽記念文庫について」以外の解説は清水康次（光華女子大学）が執筆し、与謝野晶子の資料・三木露風の歌稿・前田夕暮の歌稿については、太田登氏（天理大学）の助言を仰いだ。なお、資料解説において、展示した4点の書簡については「原文翻刻」を、5点の草稿・原稿については「概要」を併記した。また、特別展示の際に、それぞれの資料に並べて展示した「参考資料」についても、それぞれの項に付記した。

## 丹羽記念文庫について

関西学院大学名誉教授  
中島 洋一



与謝野晶子『みだれ髪』

「丹羽記念文庫」は、本学院で長く財務部長や理事として活躍された故丹羽俊彦氏の令夫人、故丹羽安喜子氏によって集められた、近代短歌を中心とするものである。1959（昭和34）年、故丹羽氏より寄贈を受け、大学図書館ではこれを「丹羽記念文庫」として目録も作り大切に保管している。故丹羽安喜子氏は与謝野晶子に師事した歌人で、『芦屋より』（1936（昭和11）年）や『低唱』（1944（昭和19）年）などの歌集を出し、1937（昭和12）年の「紫絃社」の創始者でもある。

ここに集められたものは、明治・大正・昭和の短歌を中心に三千冊近いもので、その中心はやはり与謝野晶子と鉄幹に関するもので、晶子全集を含め百五十冊ほど見いだされる。この外

に佐々木信綱や吉井勇関係のものもそれぞれ四十余冊、金子薫園や若山牧水関係のものがそれぞれ三十余冊等があり、歌集は三千冊近くに及んでいる。

雑誌類では、東京新詩社の「明星」を始め、泣菫らの「小天地」や 外の「スバル」、晶子の関係していた「よしあし草」などの貴重なものを含み三十余種類に上っている。中でも「明星」は、最近では複製本が出されているが、原本で揃って見られるのは大変珍しく貴重なものといえる。

このように、この文庫は一歌人の集めたものである故に、そう系統だったものではないが、それだけに現在では珍しい文献や未開拓の文献も含まれており、今後の研究者には貴重な資料を提供するものといえる。

第4回 大学図書館特別展示・学術資料講演会  
「近代詩の展開」解説から抜粋

## 旧蔵書簡・手稿寄贈にあたって

関西学院大学名誉教授  
八重津 洋平



八重津輝勝氏(右)と  
江見水蔭

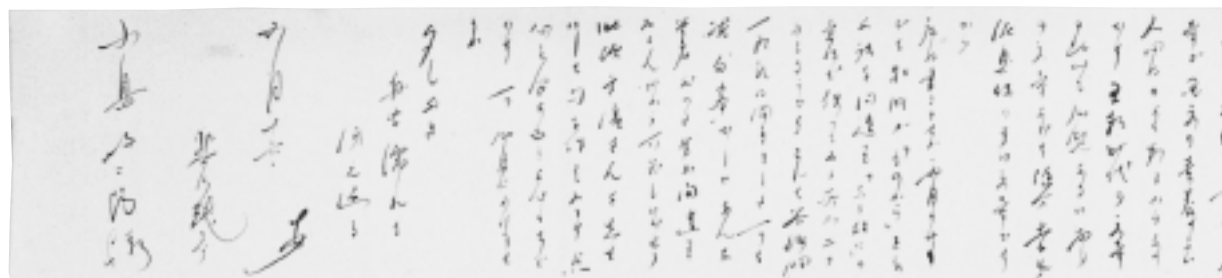
このたびは新大学図書館の落成を祝い、また建設の初期に幾分ともかかわった者として、父・輝勝が収集した資料を寄贈させていただいた。

父のことは私が7歳の時に48歳（1886 - 1934）で亡くなったので、あまり記憶に残っていない。父は長崎医学専門学校を卒業してのち、久留米にある九州高等医学専門学校（現在の久留米大学医学部）の解剖学の教授を勤めた。家は久留米藩有馬家に代々医業をもって仕えた。少年の頃から考古学に興味を持ち、小学校、中学校時代に暇を見つけては筑後地方の遺跡を訪ね、遺物を探査した。やがて、家業を継ぐため長崎で医学を学んだが、その一方で、長崎考古学会の草創のメンバーとして、遺跡の発掘調査を行い

研究論文を発表した。こうした考古学への関心の深さから人類学や解剖学の研究へと進んだ。

父が少年時代、もう一つ熱中したのが江見水蔭の探検小説（『空中飛行器』『探検実記地中の秘密』など）である。水蔭の小説は明治30年代頃の流行で、当時の青少年の血を湧かせた。今で言うファンレターを水蔭に送り、文通を通じての交際が始まったようだ。父と水蔭とは20歳ぐらい歳が離れているが、水蔭が後年全国を講演しながら生計を立てていた頃、九州に来た際、我が家に投宿されたことがある。白髪瘦躯の老人が江見水蔭という人だと父から教わり、客間に挨拶に行ったのを覚えている。

文学は趣味として愛好していたので、その範囲で当時の作家・歌人（巖谷小波、芥川龍之介、高村光太郎、与謝野晶子ら）の書簡・手稿を収集していたものと思う。資料を有意義に利用していただければ幸いである。



# 特別展示資料解説

## 第1部 近代の文学者の書簡

### No.1 芥川龍之介書簡、1918(大正7)年 5月16日付、小島政二郎宛

[原文翻刻] 拝復 /  
入学試験準備で / 五六日東京へ来てゐま / した  
今日午後鎌倉 / へ帰ります /  
地獄変はボムバスティ / ックなので書いてみて  
も気 / がさして仕方がありません / 本来もう少  
し気の利い / たものになる筈だつたんだ / がと  
毎日、新聞を見ちや考 / へてみます /  
御伽噺には弱りましたあ / れで精ぎり一杯なん  
です / 但自信は更にありません / まづい所は遠  
慮なく筆 / 削して貰ふやうに鈴木さ / んにも頼  
んで置まし / た /  
多忙は申上げる迄 / もありませんけれど時々 /  
学校まで雑誌記者氏に / 襲はれるのには恐縮し  
ま / すそれが皆押しが強いので / 此頃大分一々  
会つてゐ / るのが損なやうな気がし出 / しまし  
た /  
文章倶楽部か / 何かの文章観 ( 諸家の ) を / 見  
ると皆雨月を褒めてゐ / るでせうあれは雨月の  
文 / 章が国文の素養のない / 人間にもよく判る  
からなの / です王朝時代の文章 / に比べて御覧  
なさい雨月 / の文章などは随分土口氣 / 泥臭味  
の多い文章です / から /  
序に書きますが雨月の中 / では秋成が「ものか  
ら」と云 / ふ語を間違つて「なる故に」の / 意  
味で使つてゐる所が二つ / あるさうですこれは  
谷崎潤 / 一郎氏に聞きました一つは / 確「白峯」  
でしたあんな / 学者ぶつた男が間違つて / ゐる  
んだから可笑しいでせう /  
此頃高浜さんを先生 / にして句を作つてゐます

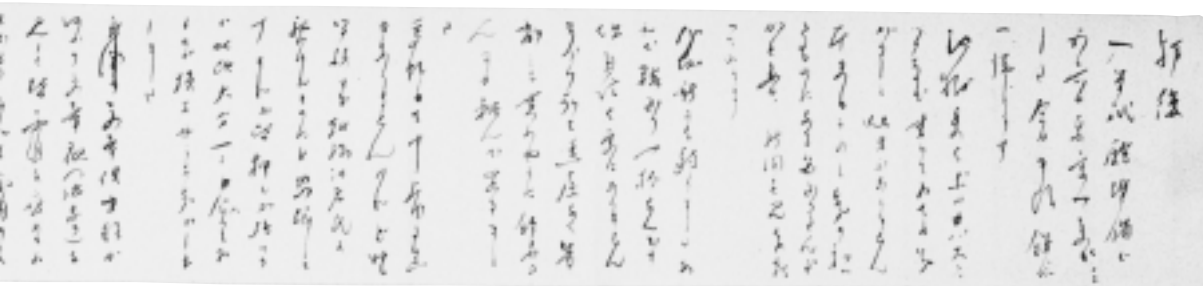
点 / 心を食ふやうな心もちで / です一つ御目  
にかけませ / うか /

夕しづき / 舟虫濡れて / 冴え返る / 頓首 /  
五月十六日 / 芥川龍之介 / 小島政二郎様

[参考資料] 芥川龍之介『傀儡師』(1919(大正8)年1月15日新潮社発行の原本の複製本、1971年5月、日本近代文学館) 『赤い鳥』創刊号(1918年(大正7)年7月発行の原本の複製本、1968年11月、日本近代文学館) 『蜘蛛の糸』原稿(複製、『近代文学手稿100選』所収、1994年11月、二元社)

[解説] 芥川龍之介(あくたがわりゆうのすけ、1892年~1927年)は、「羅生門」(1915年11月)・「鼻」(1916年2月)で登場し、1927(昭和2)年に「歯車」「或阿呆の一生」などを残して自殺した、大正期の花形作家であり、時代の指標ともいうべき文学者である。物語と知的な認識とを結合させた初期の作品から、空漠たる現実を表現した晩年の作品まで、多数の好短編小説を残している。この書簡の時期は、創作活動の高揚期にあたり、「戯作三昧」(1917年10月~11月)「地獄変」(1918年5月)「蜘蛛の糸」(同年7月)「奉教人の死」(同年9月)などが次々と産み出される。『傀儡師』(かいらいし、参考資料)は、芥川の第三短編集であり、上記4作品を含む11編の短編小説を収録している。

小島政二郎(こじままさじろう、1894年~1994年)は、大正期の『三田文学』(慶応義塾大学の文芸雑誌)から登場した小説家である。「一枚看板」(1923年2月)ほかの短編小説、「花咲く樹」(1934年3月~8月)などの新聞小説、さらに大衆小説・古典鑑賞・随筆・戯曲など、多方面に作品を残している。書簡の時期は、大



1 芥川龍之介書簡



学卒業直後で、鈴木三重吉（すずきみえきち）が童話の革新のために創刊した『赤い鳥』（参考資料）の編集を手伝いながら、芥川や菊池寛と出会っていく時期である。

書簡の文中の「御伽噺」は、『赤い鳥』創刊号のために執筆した「蜘蛛の糸」を指す。芥川は、連載中の「地獄変」を「ボムバスティック」と述べ、「蜘蛛の糸」についても「弱りましたあれで精ぎり一杯」と謙遜している。後輩の新進作家であり、『赤い鳥』の編集を手伝っていた小島への配慮と、先輩としての姿勢が随所に見られる。

「蜘蛛の糸」については、芥川が鈴木三重吉に「筆削」を依頼していたことが文中にも見える。編集者である三重吉は、作品に感心しつつも、童話としての平易さのために、漢字をかなに改め、パラフレーズを増やし、文章に手を入れる。「蜘蛛の糸」原稿（複製）（参考資料）を見ると、三重吉の朱筆での訂正をたどることができる。

## No.2 巖谷小波書簡、1905(明治38)年6月1日付、角田浩々歌客(勤一郎)宛

[原文翻刻] 御手紙拝見致し / ました御滞坂六ヶ年 / 遂に再び東都 / 文壇に御帰坐の / 御計畫此際寧ろ / 賛成の意を表し / ませう皇軍 / ます  
 大勝帝 / 国の大発展と共に / 文壇も大々の活 / 動を要する折から / 斯道の驍將が / 筆鋒を新にしての / 東上は正に斯界 / の惰眠を覚破し / て猶余あるの快 / 事と存じ升 / 委細は 当 拝眉 / の上 萬々 承る事 / に致し取りあへず / 御返事まで / 小波 / 六月朔 / 浩々歌客大人 / 坐下

[参考資料] 巖谷小波『こがね丸』（1891（明治24）年1月3日博文館発行の原本の複製本、1968年12月、日本近代文学館）、雑誌『小天地』（1900年10月～1903年1月）。

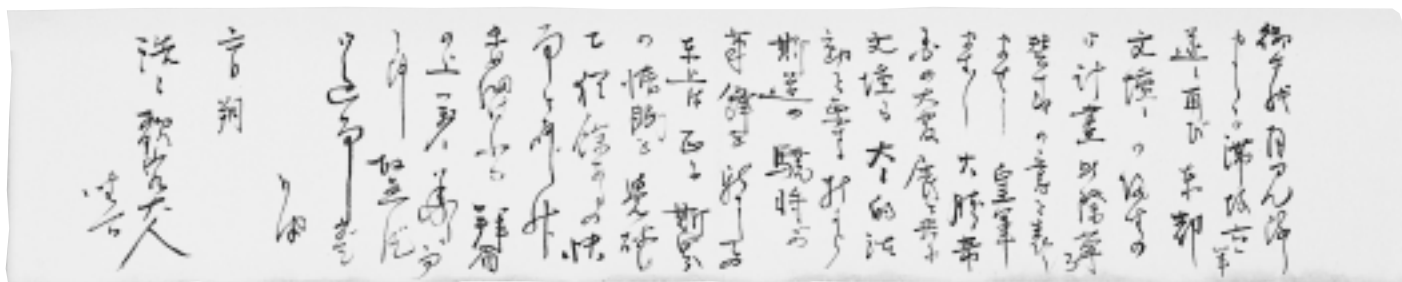
[解説] 巖谷小波（いわやさざなみ、1870年～1933年）は、硯友社の一人として作家活動を始め、児童文学の方面に多くの足跡を残した。『こがね丸』（参考資料）は、初期の作品である。創作以外にも、『日本昔噺』（1894年）を初めとする多くの叢書をまとめ、「昔噺」「お伽噺」を定着させた。また、雑誌『少年世界』ほか、児童向け雑誌の主筆をつとめた。同時に、小波は、硯友社のリーダーの一人として多くの門弟をかかえた。サロンは「木曜会」と呼ばれ、会員は、久留島武彦・黒田湖山・生田葵山ほか数十名に及び、永井荷風や押川春浪も一時期参加している。文壇の交友範囲も広い。

角田浩々歌客（かくだこうこうかきやく、本名は勤一郎、1869年～1916年）は、新聞の記者・編集者をつとめるかたわら、評論活動を展開した。1899（明治32）年には『大阪朝日新聞』の記者となり、1905（明治38）年に『大阪毎日新聞』に転じ、さらに『東京日日新聞』に移る。一方、評論活動によって、文壇に刺激を与え続けた。『大阪朝日』時代には、雑誌『小天地』（参考資料）の編集にも参加している。

この書簡の書かれた時期は、日露戦争（1904年2月～1905年9月）の終わり頃にあたる。文中に、「皇軍」の「大勝」とあるが、ちょうど5月31日・6月1日の新聞には、日本海海戦の勝利が伝えられている時である。浩々歌客は、この年5月に『大阪朝日』を退社、8月に『大阪毎日』に入社している（高松敏男「角田浩々歌客書誌」）が、その間に、東京での別の就職先を探していたのだろうか。浩々歌客が上京の意志を小波に述べ、それに小波が応じた書簡と考えられる。結果的には、大阪での生活が続くことになる。

日露戦争の後、文壇は、小波の期待どおり「大々の活動」を始め、漱石・鷗外・藤村らが活躍することになるが、小波や浩々歌客は、その「活動」の担い手とはなれなかった。

## 2 巖谷小波書簡





No.3 真山青果書簡、1910(明治43)年10月1日  
付、角田浩々歌客(勤一郎)宛

[原文翻刻] 拝啓 / 未だ御面晤の栄を得ず候へ共 / 栄祝益御多祥恭賀この事 / に奉存候時に甚だ突然紹介 / の状も無くかゝる事を御願申上ぐるは失礼の甚しき事に候へども / 御面識の栄を得ざりしため却つて / 御願申すにも又御断り下さるにも / 都合よろしと存じ故と紹介状も / 無く突然御願申上ぐる次第に / 御坐候と申すは外ならず候へ共 / 一度御紙に小説を書かせて頂く / 訳には参り不申候哉実は一度 / 骨を折りて一般読者に悦ばれる / やうなものを書いて見たしと存申 / 居候処恰好の腹案も出来候 [ま] / 甚だ押売がましく御願申上げる / 次第に御坐候回数八十回前後 / のものに御坐候自分より申上ぐるも / 変なものに候へ共小生は元来種々の / 風評ある人間に候へば斯如く御願 / 申上候へば或ひは金がほしさの濫作 / と思召されんこと口惜しく候へども / 実は決して然やうの次第にては無之候 / 若し都合よく行けば来夏あたり / 少しく遠くに遊学いたし度存申候 / に付きその準備も今より少々宛 / なりとも致し度且つはその遠遊中 / の学資として彼地に [よ] 一般読者 / に向くやうなものを時々書いて見度く / その為め真面目に研究して / 創作いたしたしと存申候今度もし / 相応の読者を引くを得候はゞ後々 / また御願申上ぐることを得んが / 希望にて多少自信あるものをば / 有力なる御紙にて発表致度と / 存ずる次第に御坐候勿論斯日 / を何時と御願致す訳には無之 / 候へ共出来る事ならば至急 / 書かして頂きたいのに御坐候 / 何分にも突然一面識も無き / 貴下へ御願申上ぐるのに候へ共 / 決して後々御迷惑を掛け候やうの / 事は誓つて無之候申過ぎる / 言には候へ共作品にも多少の / 信ずる所ありて御願申上ぐる / 次第に御坐候御聴許被下候はゞ / 幸福この上なしと存申候先は / 失礼を顧みず御願まで如斯 / に御坐候 /

陰晴不定の時候柄折角 / 御自愛祈り上げ候 / 匆々不具 /

九月三十日 / 真山 彬 / 角田勤一郎先

生 / 侍史

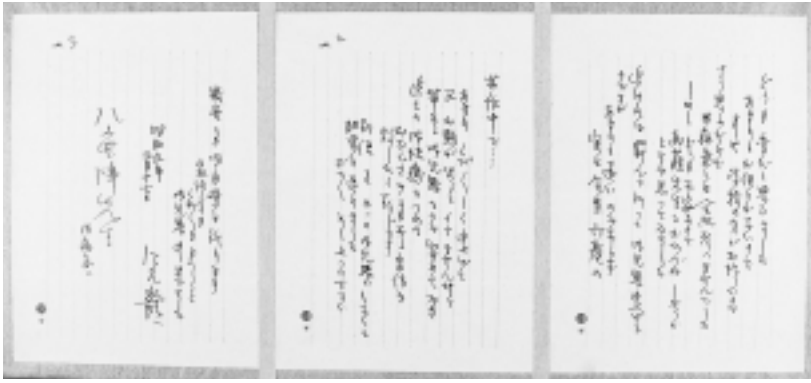
[参考資料] 真山青果『平将門』(1925(大正14)年3月12日、新潮社)

[解説] 真山青果(まやませいか、1878年~1948年)は、自然主義の小説家として活動を始めるが、のちに劇作家に転じた。明治40年代には、「南小泉村」(1907年5月)など客観的な描写の小説を書くが、1908(明治41)年・1911(明治44)年の二度、原稿の二重売り事件を起こし、激しい非難を浴びる。彼の作品を掲載する雑誌はほとんどなくなり、青果は、1913(大正2)年以降、新派演劇の戯曲作者として再起をはかり、その後、『元禄忠臣蔵』(1934年~1941年)ほか、多くの優れた戯曲を残すことになる。『平将門』(参考資料)は、『真山青果戯曲集』の第一編として刊行されたものである。

この書簡において、青果は、当時『大阪毎日新聞』の学芸部長であった浩々歌客に、「突然紹介の状も無く」、この手紙を送り、新聞の連載小説を執筆させてくれるように頼んでいる。この前年の「四十二年初頭の告白」(『読売新聞』、1909年1月1日)において、青果は、「僕は随分世間に非難の多い男である。(中略)二重売り、代作、放語、罵倒、絶交。なるほど為ました」と述べている。この書簡の「小生は元来種々の風評ある人間に候へば」ということば、また、「決して後々御迷惑を掛け候やうの事は誓つて無之候」ということばなどには、青果の置かれていた状況がよく現われており、必死の嘆願の様子が伝わってくる。しかし、結果的に、この願いは希望通りには実現していない。翌1911(明治44)年、青果は、再び原稿の二重売り事件を重ねることになる。

No.4 江見水蔭書簡、1934(昭和9)年3月  
17日付、八重津輝勝宛

[原文翻刻] どうも変だと思ひました / あまりにお便りが無いので / もしや学校の方がお忙しいので / さう思ふだけで / 御病気とは全然考へ



4 江見水蔭書簡

ませんでした / しかしどうも不安なので / 武藤先生におたづねしやうか / とまで思つてみました / 近ければ飛んで行つて御見舞申上げる / のですが / あまりに遠いのみならず / 実は全集六巻の / 苦作中で . . . . . /  
 あまりくだ / しく申上げて / 又お熱が出るとイケませんから / 単なる御見舞いにのみ留めておき / 追々の御快癒につれて / おなぐさみにもなる音信を / 致したく存じます /  
 別便にてホンの御見舞のしるしに / 粗果を送りました / ポツ / めし上つて下さい /  
 幾重にも御自愛を祈ります / 家内よりも / くれ / もよろしくと / 御見舞申出でました /  
 昭和九年 / 三月十七日 江見水蔭 / 八重津先生 / 御病床へ

[ 参考資料 ] 江見水蔭 『硯友社と紅葉』 (1927 (昭和2) 年4月3日、改造社)

[ 解説 ] 江見水蔭 (えみすいゐん、1869年～1934年) は、小波と同様に硯友社のリーダーの一人として活躍し、門下生をかかえ、サロンは「江水社」と呼ばれた。水蔭は、「女房殺し」(1895年10月)・「炭焼の煙」(1896年1月)などの短編小説で好評を博するが、明治30年代以降は探検小説・大衆小説に重心を傾けていく。その時期の「空中飛行器」(前篇・後篇、1902年2月・3月)「探検実記 地中の秘密」(1909年3月)などの多くの作品は、質の高いものではないが、少年たちに歓迎された。昭和期には、『硯友社と紅葉』(参考資料)・『自己中心明治文壇史』(1927年10月)などの回想記を著した。晩年は、揮毫と講演の旅行にあけくれ、旅の記録である『水蔭行脚全集』(全8巻)を記した。

本資料の蒐集者である八重津輝勝は、少年時代、熱烈な水蔭のファンであったという。年代的に、明治30年代の探検小説などを多く読んだと思われるが、その愛読は、輝勝少年がやがて

「解剖学」「人類学」の研究を志すきっかけの一つとなったのかもしれない。後年、輝勝は、九州旅行の途上の水蔭を歓待し、水蔭は八重津家に宿泊したという。その後、二人の親交は続いたと思われる。この書簡は、当時病を得ていた輝勝に対する、水蔭の見舞いの手紙である。文中に「全集六巻」とあるのは、『水蔭行脚全集』の第6巻を指すと考えられる。八重津輝勝は、この年11月12日に亡くなる。そして、見舞い状を出した側の水蔭も、この年11月3日に、松山市の旅館で没している。

## 第2部 近代の文学者の草稿・原稿

### No.5 高村光太郎草稿「小娘」・「家」

[ 概要 ] 400字詰原稿用紙(20字10行2面)2枚・同4枚。

[ 参考資料 ] 高村光太郎 『道程』(1914(大正3)年10月25日抒情詩社発行の原本の複製本、1968年9月、日本近代文学館) 『道程』改訂本(1940(昭和15)年11月20日、山雅房) 高村光太郎「緑色の太陽」(雑誌『スバル』1910(明治43)年4月号)

[ 解説 ] 高村光太郎(たかむらこうたろう、1883年～1956年)は、彫刻家であり、詩人である。アメリカ・ヨーロッパに留学し、西洋的な芸術家の自我にめざめ、帰国後、日本の旧弊さの中で苦しむ。『スバル』1910(明治43)年4月号に、評論「緑色の太陽」(参考資料)を発表し、個性的な自我の解放を訴えた。本格的に詩作を始め、1914(大正3)年、長沼智恵子と結婚し、詩集『道程』(参考資料)を刊行し



5 高村光太郎草稿「小娘」(右)



(筆跡は与謝野寛の代筆と思われる)。

5 高村光太郎草稿  
「家」(左)

た。その後、智恵子との生活と彫刻に専念していくが、1931(昭和6)年頃から、智恵子は精神に変調をきたし、1938(昭和13)年没する。1941(昭和16)年、詩集『智恵子抄』を刊行する。戦争中には戦争協力の詩を制作し、戦後、「暗愚小伝」において、自己の人生を悔恨を込めて振り返っている。近代の日本の進路をもっとも厳しい形で体現した芸術家といえる。

『道程』は、光太郎の第一詩集であり、自我が高調した声を響かせている。この後、光太郎は詩作から遠ざかり、『智恵子抄』まで新たな詩集はない。ただし、この間に、『現代詩人全集』第9巻『高村光太郎・室生犀星・萩原朔太郎集』(1929年10月)が刊行されており、また、『道程』の詩編を削り、「道程以後」・「猛獣篇時代」の詩編を加えた、改訂本『道程』(参考資料)が刊行されている。この草稿にかかわる詩「わが家」・「小娘」は、いずれも改訂本『道程』において増補された「道程以後」の詩編である。

草稿「小娘」は、1917(大正6)年に制作された詩「小娘」の草稿であり(掲載誌は未詳)、改訂本『道程』収録の本文との間に、細部的な異同がある。

草稿「家」は、1921(大正10)年5月に発表された「家」の草稿である(掲載誌は未詳)。のちに随筆集『美について』(1941年8月)に収録されている。ただし、草稿では、後半部分に「五年前に書いた私の詩一篇」が書かれているが、定稿では削除されている。この「詩一篇」は、1916(大正5)年10月に雑誌『感情』に発表された「我家」にあたり、のちに、一部分が削除され、「わが家」として改訂本『道程』に収録されている。

## No.6 与謝野晶子資料「婦人と短歌」

[概要] 400字詰原稿用紙(20字10行2面)2枚

[参考資料] 与謝野晶子『みだれ髪』初版(1901(明治34)年8月15日、東京新詩社・伊藤文友館) 『みだれ髪』訂正3版(1904(明治37)年9月5日、杉本書店・金尾文淵堂) 『みだれ髪』4版(1906(明治39)年10月1日、杉本書店・金尾文淵堂) 雑誌『明星』(第1次、1900年4月~1908年11月)。

[解説] 与謝野晶子(よさのあきこ、1878年~1942年)は、与謝野寛(よさのひろし、鉄幹)の創始した東京新詩社に入会。機関誌『明星』(参考資料)に多くの短歌を発表し、それらの歌をまとめて、1901(明治34)年8月、第一歌集『みだれ髪』(参考資料)を刊行する。若々しい情熱や感情をストレートに、また絢爛に歌い上げ、ロマンチズムの新しい旗手として注目を浴びた。晶子は、この年六月、家を出て上京し、与謝野寛との恋愛を貫き、10月結婚。11人の子供を産み育てることになる夫婦生活を始める。

『みだれ髪』は、3版(参考資料)において改訂が施された。丹羽記念文庫には、初版・3版・4版(参考資料)が所蔵されている。晶子の歌集・詩歌集・歌文集は、共著も含めると生涯に20冊以上にのぼり、歌風は徐々に変化していく。また、随筆・評論集は15冊を刊行、多くの文章において女性の自立を訴え続け、当時の女性たちと、女性をとりまく社会に対して、大きな影響を与えた。さらに、古典研究にも多くの足跡を残した。日本近代の文学者の中で、



6 与謝野晶子資料  
「婦人と短歌」



もっとも現実的な形で、自己を發展させた一人といえる。

草稿「婦人と短歌」は、『女子文壇』などの投書雑誌に書かれた初心者向けの文章の一部であろうか。あるいは、講演の要旨であろうか。掲載誌や執筆時期は未詳である。古典文学の例を引きながら、「我国の女子の素質が文学的であり、殊に端的に感情を表現する短歌に適してゐる」とし、現代の女性にも「奮発」を望んでいる。また、「私が歌を作つてゐる体験について申述べようと思」うと記されている。ただし、筆跡は与謝野寛の代筆と思われる。寛の代筆した晶子の草稿は他にも存在しており、二人の協力関係を示している。内容的には、寛の「和歌は婦人に適す」(1909年4月)や、晶子の「女子と詩歌」(1920年2月)・「女子と文学」(1929年10月)などと通じるものである。

### No.7 三木露風歌稿「彩雲」

[概要] 400字詰原稿用紙(20字10行2面)3枚。

[参考資料] 三木露風『夏姫』(1905(明治38)年7月15日血汐会発行の原本の複製本、1979年6月、霞城館) 露風『白き手の獵人』(1913(大正2)年9月25日、東雲堂書店)

[解説] 三木露風(みきろふう、1889年~1964年)は、象徴詩の完成者といわれ、詩人として有名であるが、初期には、短歌活動が大きな部分を占めていた。1905(明治38)年刊行の詩歌集『夏姫』(参考資料)には、与謝野晶子の影響を受けた短歌が多く収録されている。同年、尾上柴舟を中心に結成された車前草社に参加し、雑誌『新声』の「車前草社詩草(詩稿)」欄にも短歌を発表しているが、次第に詩に重心を移す。1909(明治42)年9月、詩集『麁園』を刊行し、北原白秋の『邪宗門』(同年3月)と

並んで注目を浴びる。彼の詩は、『寂しき曙』(1910年11月)を経て、『白き手の獵人』(参考資料)で一つの到達点を迎えたといわれている。また、「赤とんぼ」など童謡の作詞者としても有名である。

歌稿「彩雲」は、16首の短歌を記している。露風は、1907(明治40)年以降は本格的な短歌活動からは遠ざかっている。この歌稿は、それ以前の車前草社時代の詠草をまとめたものと考えられるが、詩歌集『夏姫』収録の歌も含まれており、文学的出発をめざした時期の浪漫主義短歌の香気が感じ取れる。第6首と第10首が『夏姫』収録の短歌であり、後者はその巻頭歌である。そのほかには、1906(明治39)年に各紙誌に掲載された歌群に見える短歌が多い。小さな異同のあるものを含めると、第2首は『山鳩』(11月) 第3首は『読売新聞』(4月) 第4首は『国詩』(1月) 第5首は『新声』(12月) 第8首は『ホノホ』(3月) 第9首は『新声』(1月) 第12首は『山鳩』(9月) 第13首は『婦人世界』(7月)のそれぞれに掲載された歌群に見える短歌である。

### No.8 前田夕暮歌稿「潮鳴」

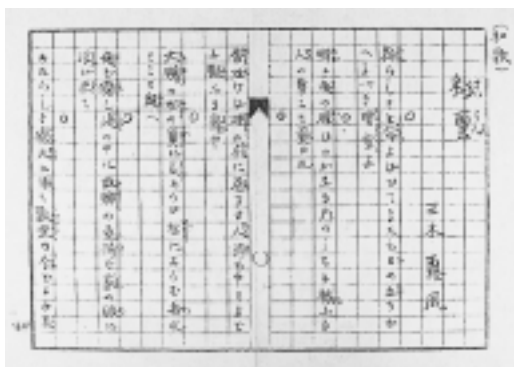
[概要] 648字詰原稿用紙(27字12行2面)2枚。

[参考資料] 前田夕暮『収穫』(1910(明治43)年3月15日、易風社) 雑誌『詩歌』(第1次、1911年4月~1918年10月、複製本、1978年7月、教育出版センター)

[解説] 前田夕暮(まえだゆうぐれ、1883年~1951年)は、尾上柴舟に師事し、1905(明治38)年の車前草社の結成に、若山牧水・正富汪洋とともに参加する。雑誌『新声』に連載された「車前草社詩草(詩稿)」に短歌を発表し、『哀楽第壹』・『哀楽第貳』のパンフレット歌集を経て、1910(明治43)年、事実上の処女歌集である『収穫』(参考資料)を刊行。若山牧水の『別離』(同年4月)と並び称され、自然主義歌人として注目された。1911(明治44)年4月、短歌雑誌『詩歌』(参考資料)を創刊。尾山篤二郎らが参加し、三木露風も時々寄稿した。その後、歌集は、『陰影』・『生くる日に』と続く。

歌稿「潮鳴」は、10首の短歌を記している。夕暮は、『哀楽』以前の習作時代において、膨大な量の短歌ノートを作っており、『前田夕暮

#### 7 三木露風歌稿 「彩雲」



全集』第1巻（1972年7月）には、当時のまとまった歌稿がいくつか収録されている。その中の「夕陰草」と題された歌稿（1906年～1907年、計473首）に、この「潮鳴」の10首のうち、最初の短歌（「君が国へ……」）を除く9首が含まれている。『前田夕暮全集』の「解説」（香川進）には、「歌稿として一冊にまとめられているもの」のほかに「散発的にのこっているもの」もあると記されているが、この歌稿も、当時作られた、「散発的」な歌稿の一つと考えられる。自然主義的な歌風を確立する以前の夕暮をうかがわせるものである。



### No.9 三宅花園原稿「花の趣味」

[ 概要 ] 540字詰原稿用紙（27字20行）7枚・原稿用紙の断片（19字7～19行）9枚。

[ 参考資料 ] 田辺花園『藪の鶯』（1888（明治21）年6月10日、金港堂）

[ 解説 ] 三宅花園（みやけかほ、1868年～1943年）は、旧姓は田辺、本名は龍子。1888（明治21）年、坪内逍遙の校閲を経て『藪の鶯』（参考資料）を刊行、新しい女性作家として注目を浴びる。「藪の鶯」は、逍遙の「当世書生気質」（1885年～1886年）に触発されて書かれた小説である。また、中島歌子の萩の舎塾で、花園と同門であった樋口一葉に、小説家になる決心させた作品ともいわれている。その後、「八重桜」（1890年4月～5月）などを発表するが、小説の執筆期間は短い。1892（明治25）年、三宅雪嶺（みやけせつれい）と結婚し、以降は随筆・評論がほとんどとなる。花園はまた、歌人でもある。

「花の趣味」は、雪嶺編集の雑誌『日本及日本人』の1907（明治40）年1月15日発行の451号から1908（明治41）年7月1日発行の487号まで、



9 三宅花園原稿  
「花の趣味」

断続的に連載された。増補されて、1909（明治42）年4月に服部書店から『花の趣味』として刊行。内容は、「ゼラニウム」「クローカス」「梅」など26章からなり、それぞれの花について、育て方、楽しみ方、伝説や詩歌の紹介などを記している。趣味的で文学的な随筆であり、英文の詩と翻訳を掲げるなど、西洋的な教養の香りがある。この資料は、『日本及日本人』第455号（1907（明治40）年3月15日発行）に掲載された「ヒヤシンス」の章の原稿と、第461号（同年6月15日発行）の「アマリリス」の章（この回は本文に章題がなく、単行本による）の原稿である。

8 前田夕暮歌稿  
「潮鳴」（左）

#### 清水 康次（しみず やすつぐ）

光華女子大学日本文学教授。

専攻は日本近代文学。

芥川龍之介・志賀直哉・夏目漱石の作品が研究の中心。

近代文学の書誌についても調査している。

著書に『芥川文学の方法と世界』（1994、和泉書院）がある。